

修辞学

柳澤 浩哉

最近出版された本の中から、実用性の高い修辞学書(翻訳)と、他領域から修辞学にアプローチした2冊を紹介したい。

ジェイ・ハインリックス、多賀谷正子訳『THE RHETORIC 人生の武器としての伝える技術』(2018年、ポプラ社)。古典修辞学を現代的な実用書に作り変えた本であり、本書の確かさと魅力は、原著が2016年にハーバード大学の必読書ベスト10に選出されたことで保証されている。修辞学の実践的知見の数々が、軽妙な語り口で披露されており大変読みやすい。説得を捉える基本的枠組みは古典修辞学のもの踏襲しているが、随所に修正が加えられており、古典修辞学の現代的解釈の事例として興味深い。個人的には、エートス(性格による説得)、議論法、虚偽論などの比重が増していること(議論法と虚偽論は20世紀後半から欧米で重視されている領域)、心理学的興味から語られることの多かったパトス(感情からの説得)が、ステレオタイプとの異同から論じられている点(W.リップマンが『世論』で展開したアイデア)などが興味深かった。また、本書に引用された事例からはアメリカの家庭での会話がいかにレトリックに満ちているかが伝わり、原著者の意図とは異なるところでも感銘を受けた。

中村圭志『宗教のレトリック』(2012年、トランスビュー)。宗教学者による本書は、様々な宗教的発想(営み)を10の文彩に類型化する試みである。作者の博

識に感心しつつ、同一の発想あるいは説得が古今東西の宗教で幾度となく繰り返されてきたことを教えられる。修辞学の観点から見て興味深いのは、文彩に対する柔軟な解釈であり、例えば、仏陀(覚者の意)、キリスト(ユダヤ社会でダビデ王の再来として戴冠した王を指す「油注がれた者」(メシア)のギリシャ語訳)などのネーミングを提喩に分類した上で、その発想の中に宗教者に共通する才能を見出していく。あるいは直喩と隠喩の違いを対象に対する距離感の違いとして説明した点も鋭く、このアイデアは近年の言語学で注目される証拠性(evidentiality)を先取りした発想と言えらる。示唆に富む一冊である。

青沼智・池田理知子・平野順也編『メディア・レトリック論 文化・政治・コミュニケーション』(2018年、ナカニシヤ出版)。社会学者による「メディアの未来」シリーズの一冊であり、広告、インスタグラム、レズビアン、スポーツ報道など多様な営みをレトリックという同一の地平から捉え直そうする試みである。古典修辞学(旧修辞学)に敬意を表しているものの、肝心の修辞学の知識を持たないために、修辞学の知見を活かした分析がなされていない。その結果、どの項目の考察も、隠れた偏見や権力をあぶり出すという「定型」に収斂してしまっている。だが、本書の主張する立場はごくまっとうであり、本書に提示された対象を修辞学の知見を使って分析していけば、メディアによる表現形式(様式)の微妙な違いを引き出せるように思える。表現学が注目すべき一冊である。

(広島大学)